

②ワークライフバランスと男女共同参画に対する意識

このセクションでは、ワークライフバランスと男女共同参画に対する意識の現状を検証してみたい。

図-②-1 仕事、家庭生活、地域・個人の生活の優先の仕方の男女による違い

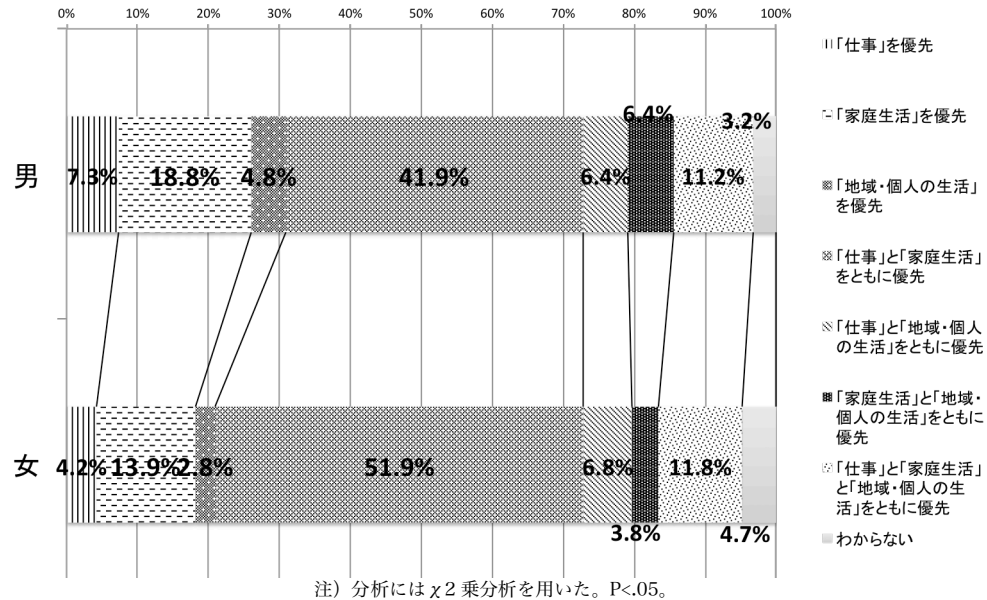
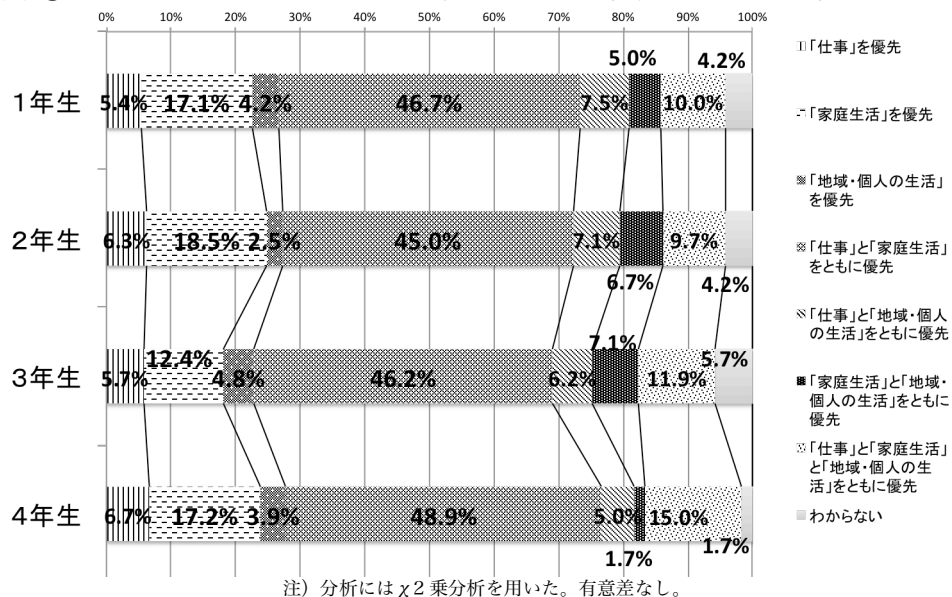


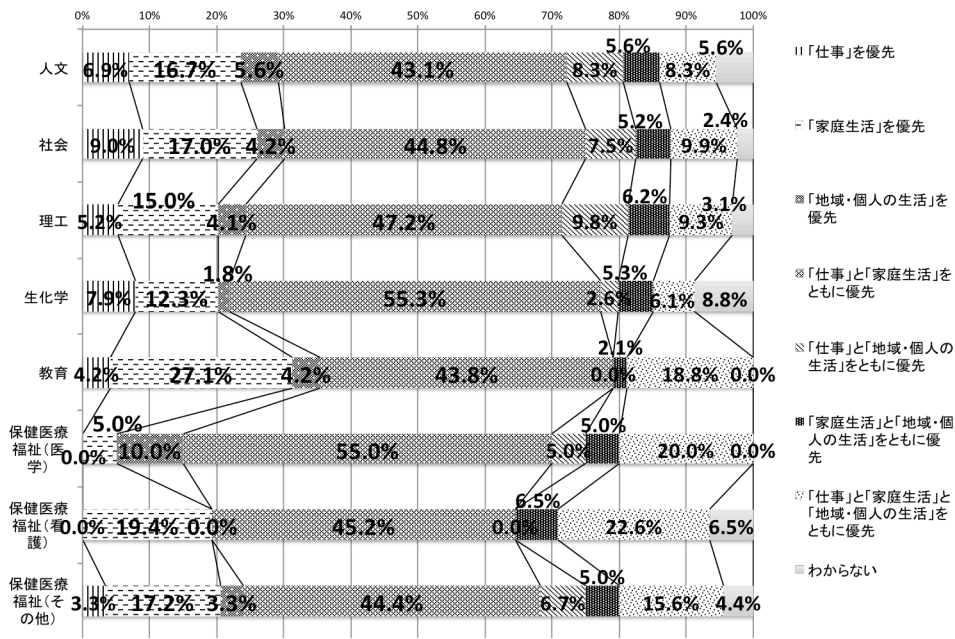
図-②-2 仕事、家庭生活、地域・個人の生活の優先の仕方の学年による違い



Q10で「仕事」「家庭生活」「地域・個人の生活」の優先度の希望をたずねた。その回答の分布を男女別に見てみると、まず男子では、「仕事を優先させる」という回答が多い。また、「家庭生活を優先させる」という回答も女子よりも多い。一方女子では、「仕事と家庭生活をともに優先させる」という回答が男子よりも10ポイント多い。全体的に女子の方が複数をともに優先させるという回答が男子よりも多い。

学年については、統計的に有意な差は見られず、生活における仕事、家庭生活、個人の生活の優先の仕方は、例えば学年が上がれば変化してくるという傾向は見られなかった。

図-②-3 仕事、家庭生活、地域・個人の生活の優先の仕方の専攻による違い



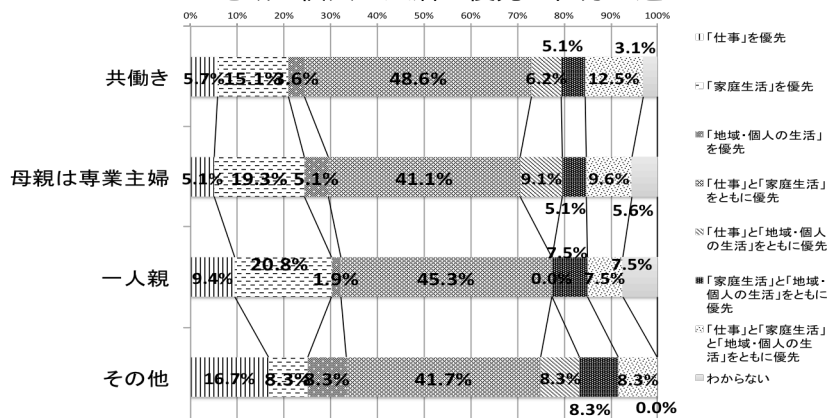
注) 分析にはχ²乗分析を用いた。有意差なし。

専攻についても学年同様、統計的有意差は見られなかった。

しかし、興味深いのは、理工系や生化学系、医学系で「仕事と家庭生活をともに優先」の回答が多い点である。これは、とすれば、理系の仕事が家庭生活から切り離されてしまいがちという反省から、意識的に私生活と仕事の両立の重要性が次世代に促されてきた結果の表れなのかもしれない。

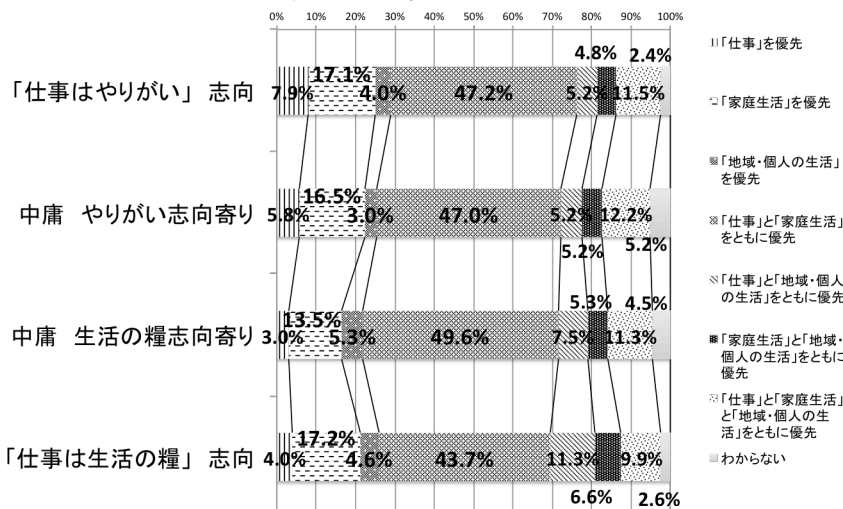
育ってきた環境による影響も考慮し、実家は共働きであったかどうかによる違いを見た。統計的に有意な差ではないものの、共働きあるいは一人親の場合、「仕事と家庭生活をともに優先」の回答が多いことが見て取れる。子どもは親の背中を見ているとも言えるのかもしれない。

図-②-4 実家が共働きかどうかによる仕事、家庭生活、地域・個人の生活の優先の仕方の違い



注) 分析にはχ²乗分析を用いた。有意差なし。

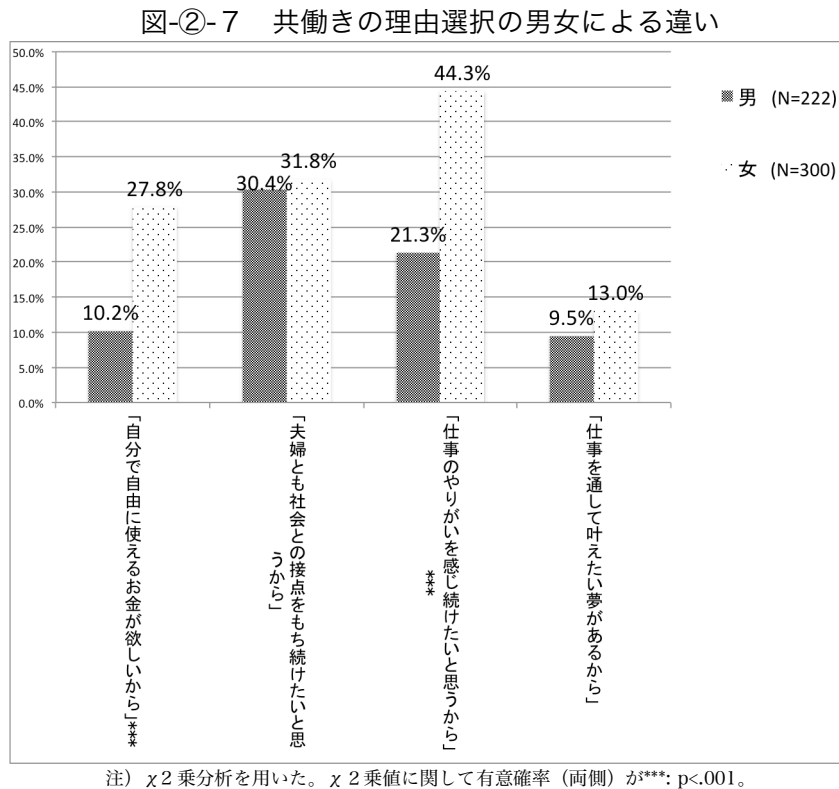
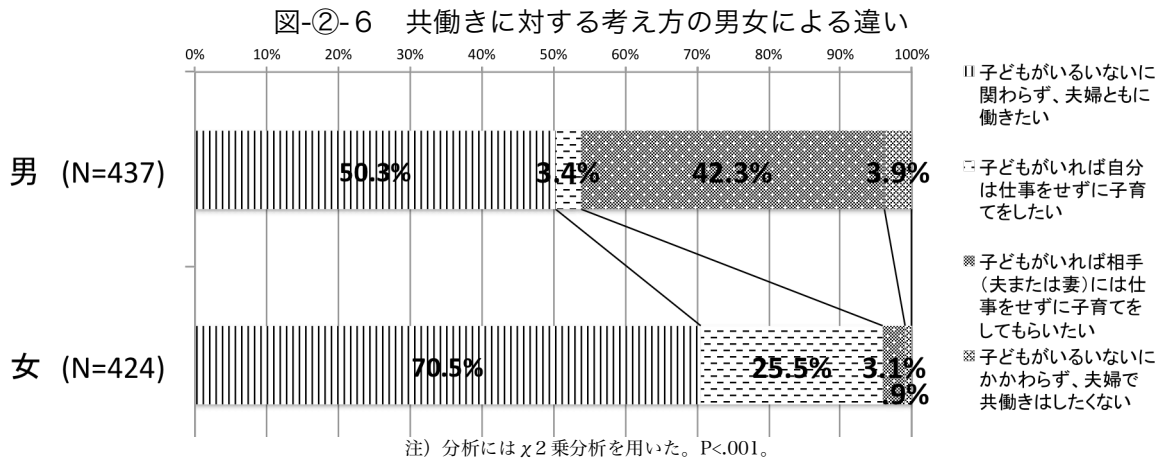
図-②-5 仕事、家庭生活、地域・個人の生活の優先の仕方の就職選択基準クラスターによる違い



注) 分析にはχ²乗分析を用いた。有意差なし。

前セクションで検証した就職先選択基準によるクラスター間の分布の違いを見たが、統計的な有意差はなかった。この結果から、就職後、家庭をもった時の具体的なイメージが、必ずしも就職先の選択基準と結びついていないと言えるのかもしれない。

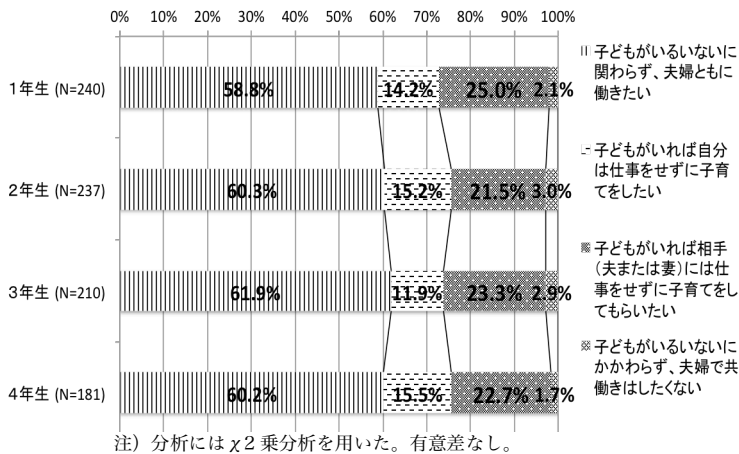
次に、共働きに対する考え方全般（Q6）と共働きをすることをした場合の理由（Q7：複数選択）をたずねた質問項目に対する回答を元に、共働きに対する考え方について検証する。



共働きに対する考え方では、男女による違いは大きく出た。上段のグラフから、男子よりも女子の方が圧倒的に夫婦ともに働くことを希望している様子が見える。一方、子育てに関しては、女子も仕事をせずに専念したいと考える回答者は約4分の1(25.5%)いることがわかる。それにも増して、男子では(女性を想定した)パートナーに子育てに専念してほしいと考えるものは42%おり、これは女子の約26%との差として理解できると言えよう。

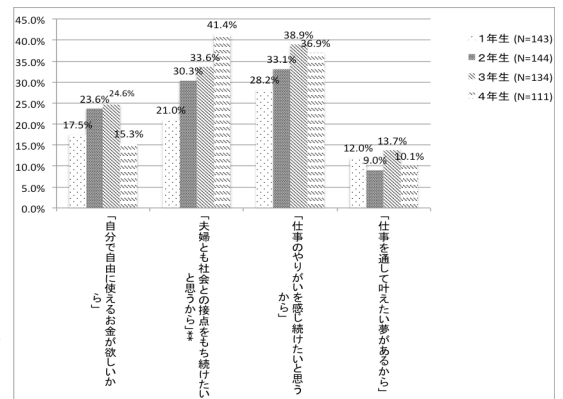
共働きの理由について、複数選択式の回答の様子を見てみると、「自分で自由に使えるお金が欲しいから」と、「仕事のやりがいを感じ続けたいから」という理由を、女子が男子に比べて非常に多く選択しており、これは統計的に有意な差であった。

図-②-8 共働きに対する考え方の学年による違い



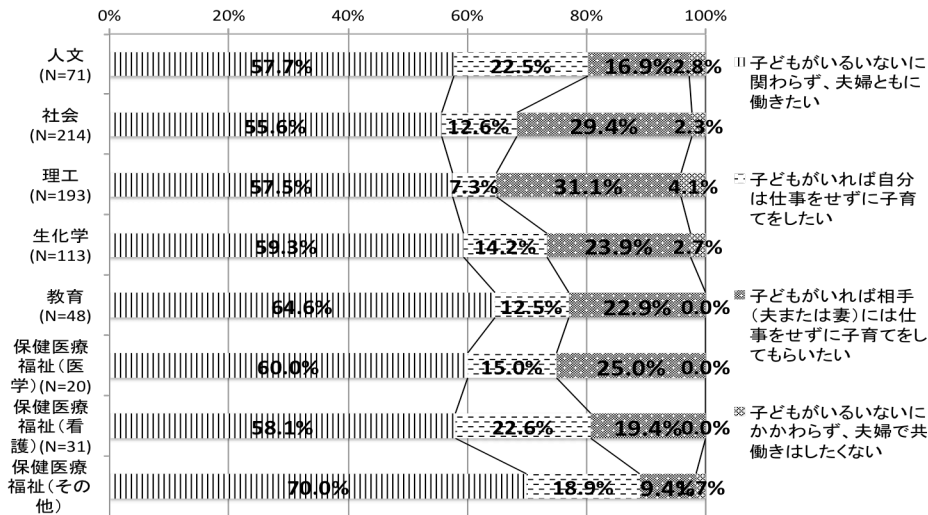
注) 分析にはχ²乗分析を用いた。有意差なし。

図-②-9 学年による共働きの理由選択の違い



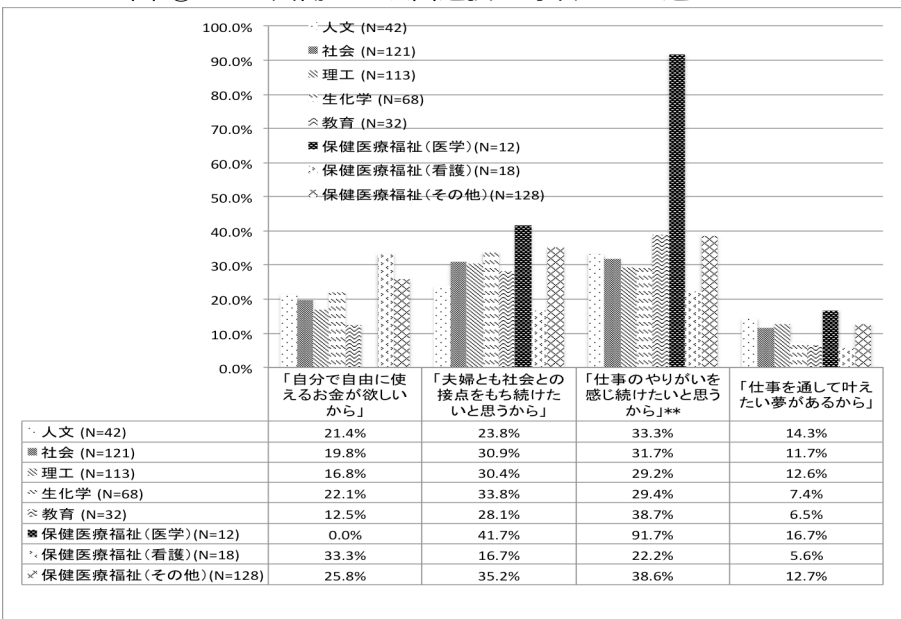
注) χ²乗分析を用いた。χ²乗値に関して有意確率(両側)が***:p<.01。

図-②-10 共働きに対する考え方の専攻による違い



注) 分析にはχ²乗分析を用いた。P<.001。

図-②-11 共働きの理由選択の専攻による違い



注) χ²乗分析を用いた。χ²乗値に関して有意確率(両側)が***:p<.001, **:p<.01, *:p<.05, +:p=-.05。

共働きに対する学年による考え方の違いは見られなかった。共働きの理由では、「夫婦とも社会との接点を持ち続けたい」という回答は学年が上がるごとに多くなっている。

専攻による違いは、統計的に有意なものであった。大きな違いが表れたのは、「子どもがいれば自分が仕事をせずに子育てをしたい」と、「子どもがいれば相手に仕事をせずに子育てをしてもらいたい」の選択である。これは、看護系で女子、理工系、社会系で男子の回答者が多いという専攻内の男女比を反映した結果と言えるかもしれない。

共働きの理由については、「仕事のやりがいを感じ続けたい」に有意差が見られた。特に医学系で高い(91.7%)。

図-②-12 共働きに対する考え方の実家が共働きかどうかによる違い

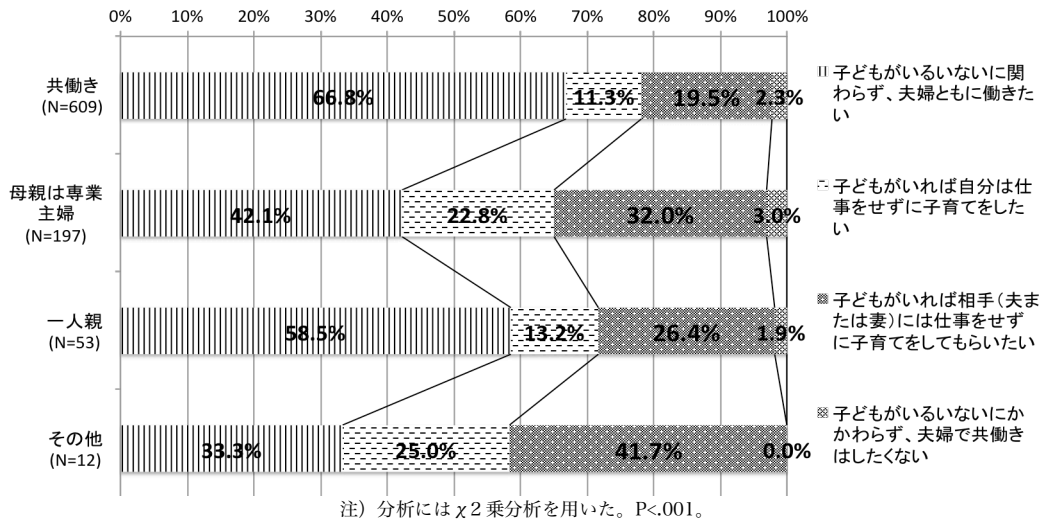
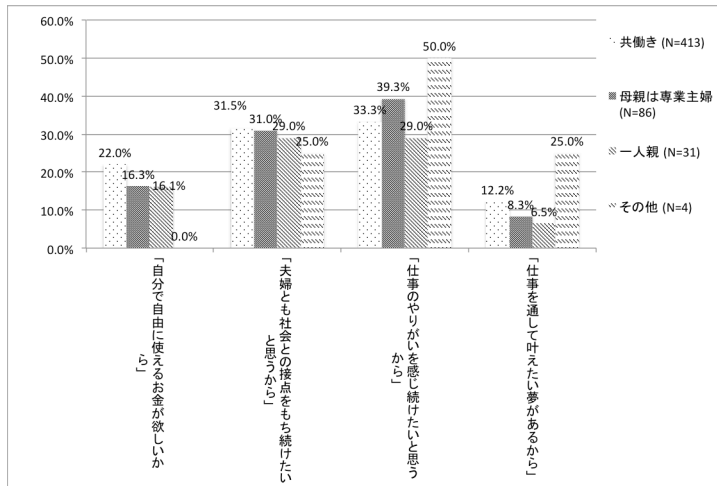


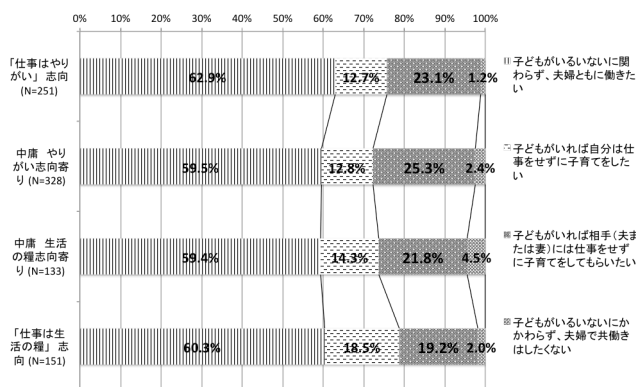
図-②-13 共働きの理由選択の実家が共働きかどうかによる違い



注) χ²乗分析を用いた。有意差なし。

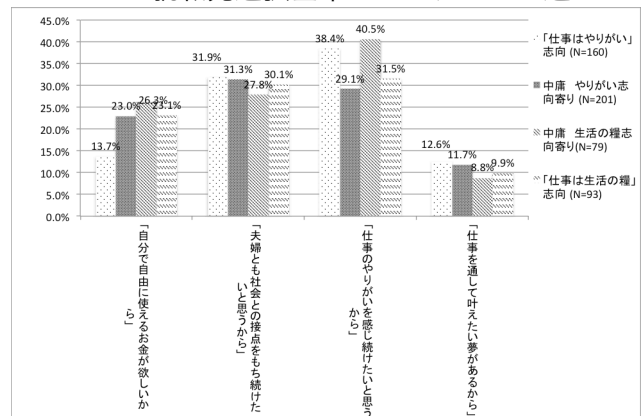
実家が共働きだったかどうかで、共働きに対する考え方に統計的な有意差が見られた。共働きであった場合には、「子どもの有無に関わらず夫婦ともに働きたい」という回答が多かった。一方、母親が専業主婦だった場合には、自分かパートナーに子育てに専念してほしいという回答が多い。理由では、統計的に有意な差はなかった。

図-②-14 共働きに対する考え方の就職先選択基準クラスタによる違い



注) 分析にはχ²乗分析を用いた。有意差なし。

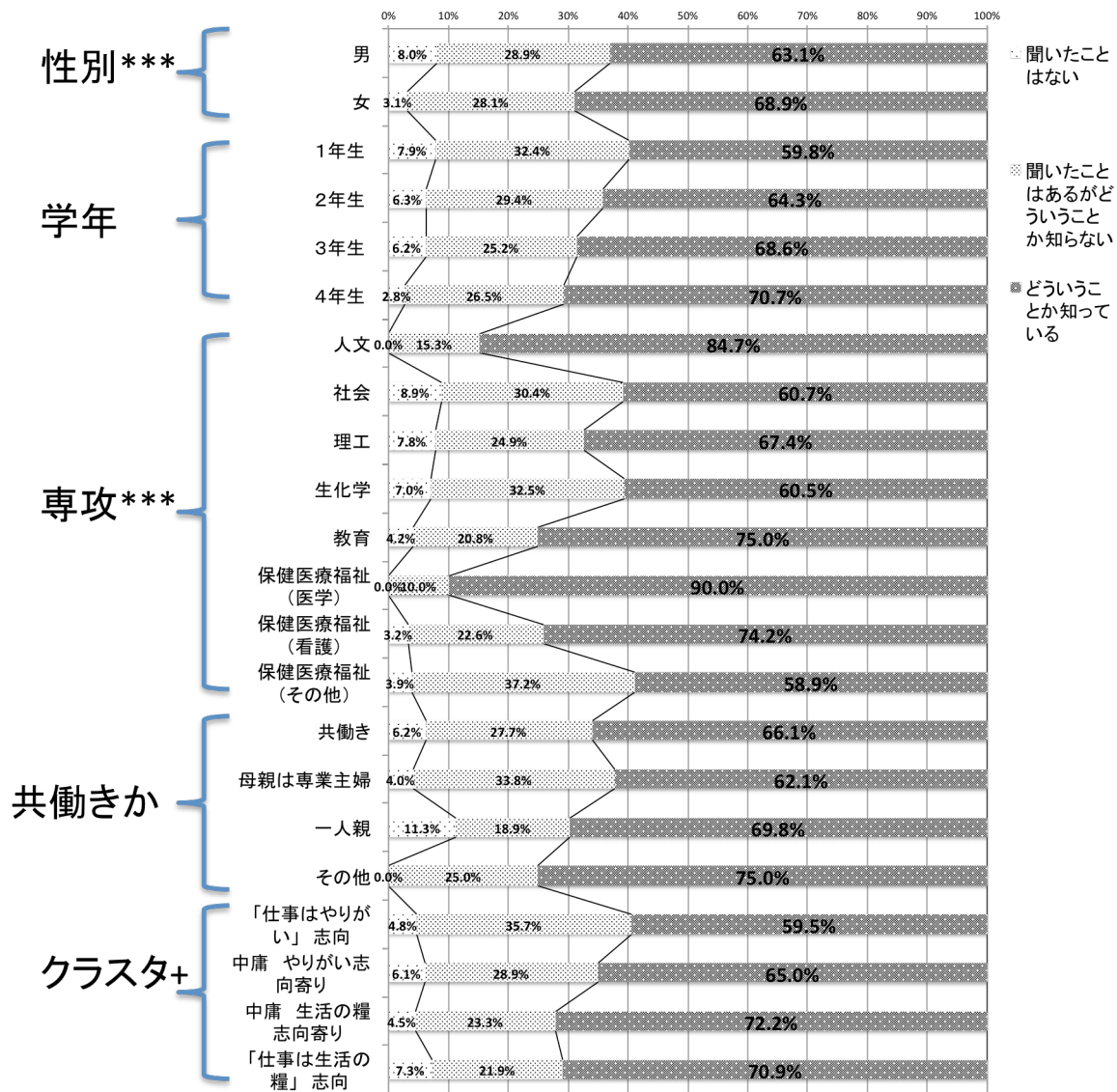
図-②-15 共働きの理由選択の就職先選択基準クラスタによる違い



次に、就職先選択基準によるクラスタ間で、共働きに対する考え方の違いを検証した。クラスタ間で統計的な有意差はなかった。また、共働きの理由についてもクラスタ間の違いは有意なものではなかった。

どのくらいの大学生が、男女共同参画とワークライフバランスについて知っているのかを
 見てみる。

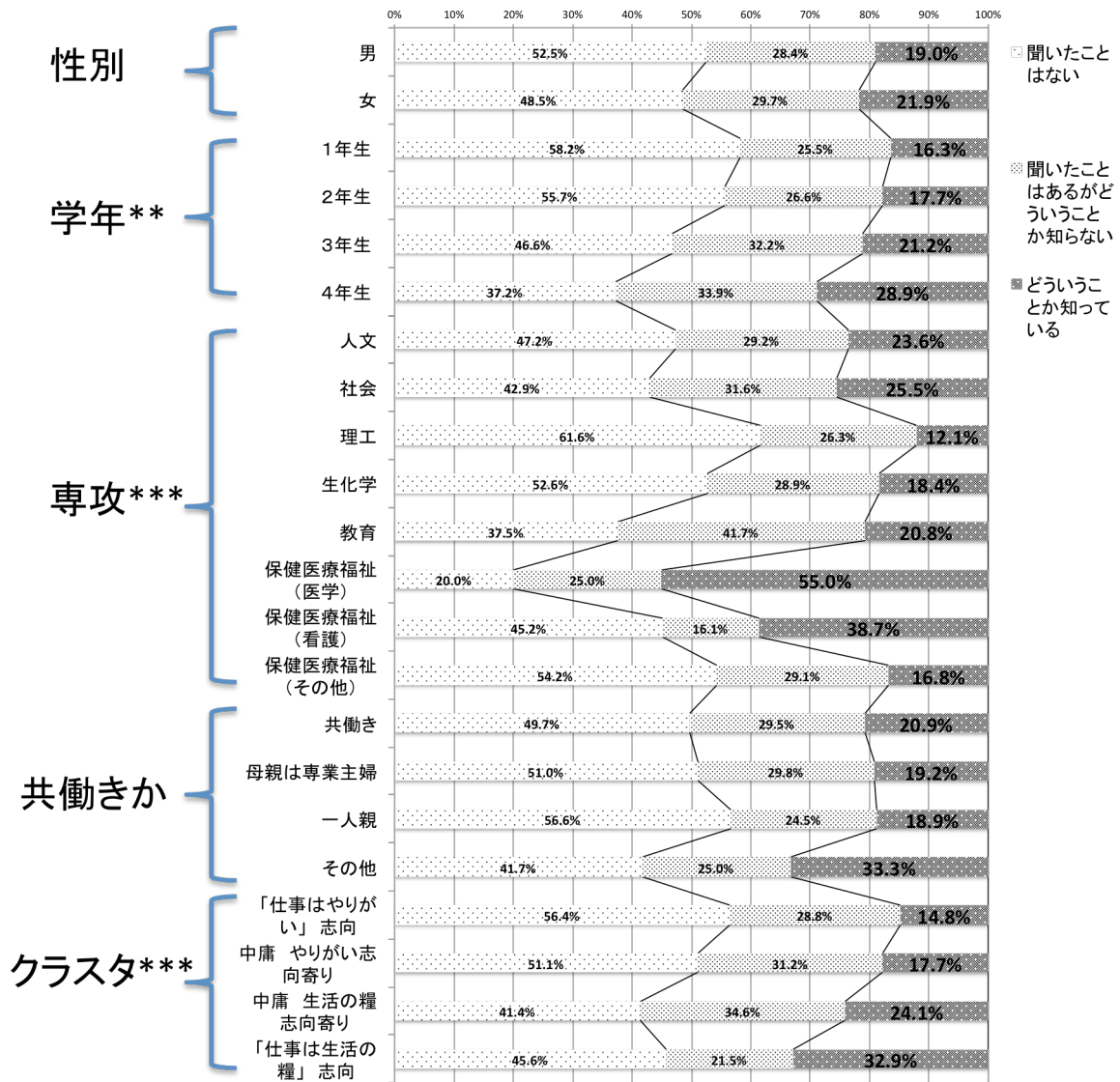
図-②-16 男女共同参画の認知度の属性および就職先選択基準クラスタによる違い



注) χ^2 乗分析を用いた。 χ^2 乗値に関して有意確率(両側)が***: $p < .001$, +: $p = .05$ 。

男女共同参画の認知度では、性別、専攻間で有意な差が見られた。女子のほうが男子よりも少なくとも「聞いたことがある」か、あるいは「どういうことかを知っている」という回答が多い。専攻では、人文系、教育系と保健医療福祉系の医学と看護で認知度が高いが、特に医学系では「どういうことか知っている」という回答は9割に及ぶ。就職先選択基準によるクラスタ間の違いは、有意に近いものだった。「仕事はやりがい」志向では内容まで知っているという回答が少ない。

図-②-17 ワーク・ライフ・バランス認知度の属性および就職先選択基準クラスタによる違い



注) χ^2 乗分析を用いた。 χ^2 乗値に関して有意確率(両側)が***: $p < .001$, **: $p < .01$ 。

ワークライフバランスの認知度では、学年、専攻、就職先選択基準クラスタ間で統計的な有意差が見られた。学年が上がるにつれて、ワークライフバランスの認知度は上がっていていることが分かる。専攻では、教育系と医療福祉系の医学で、他の専攻と比較して認知度が高いことが分かる。

就職先選択基準クラスタ間では、「どういうことか知っている」という選択で「仕事はやりがい」志向から「仕事は生活の糧」志向へと段階的に回答の割合が大きくなり、順列として表れている。